

6. 山つなみ

ツキノワは、きじが、まむしをたい治してくれたことを知らずにいました。

で、あなの出口に、まむしが見張っていると思って、しばらくはささぐまの土あなから、帰れそうもないとあきらめたものか、ささぐまの子ども達と昼ねをして帰ろうと、のん気な考えを起こしました。

そして、ささぐまの子ども達のそばへ横になると、すぐねついて、深い土あなのおくでは、時間も分からず、あらしも地面の上を通過してしまうので、何んにも知らず長い間、グウグウぐっすり、いゝ気持でねむっていました。

すると、そのツキノワのね顔へ、どうしたはずみか、火事場から火の粉が飛んで来たので……

「熱っ、熱つつつ——」

と、びっくりして目を覚まし、飛び起きてあなの外をのぞいて見ると、もうもう立ちのぼる黒煙と一しょに、まっ赤な火の粉が、一ぱい飛んで来るので、

「あっ赤い花の悪まだ！」

と、思い出したようにあわてて、あなの中からはい出ると、ピューピューはげしいあらしで、谷向こうのひのき山が、明々ともえ上がっていました。そして空には、いつの間にか夕暮れの雲が流れて、そのうえ、まっ黒な雨雲が、頭の上からおおいかかるように低く飛んでいるので、一っそう火の手が、大きく明るく映って見えました。

「大きな、赤い花の悪まだな——」

と、ハラハラしながら、横吹きのあらしの中を夢中になって、大くりの木の下まで、フーフー息をつぎながら走って行くと、野うさぎの両親やりすの家族も、みんなすの中から飛び出して、わいわいさわいしていました。

そして、野うさぎの両親は、子うさぎ達のすがたが見えないので、ことに母うさぎは、早や泣き顔になって……

「——たしかに、子うさぎ達は、朝早くから、ひのき山のふもとへ、みんなで草かりに出かけたんです——まだ帰らないところをみると、赤い花の悪まに食われてしまったにちがいありません——」

と、悲しそうになみだを流しています。

で、父うさぎは、これを打ち消すように、……

「でも、そう、くよくよ思っても仕方がないよ——あらしの中の、こんな大きな赤い花の悪までは、見に行つてやることも、救いに行つてやることも出来ないじゃないか、それに、みんなは、なんとかうまく、無事に逃げていると思うんだが——」

……母うさぎを元気付けるためにそう言いましたが、本当は、父うさぎも心の中では、心配で心配でなりません。

すると、また、母うさぎが、

「無事に逃げたものなら、とっくにこちらの岸へ、帰って来ているはずじゃありませんか——」

と、なじるように言いました。

だが、この言葉を聞いて父うさぎは、ようよう子うさぎ達の、帰って来ないわけが分かったように……

「ハ、ハ、——こちらへ逃げれば風下だから、赤い花の悪まに、みんな食われてしまうじゃないか——そうだ。きっと、子うさぎ達は、風上の向こうの方へ、うまく逃げているにちがいない。そして、赤い花の悪まが、消えてしまってから、ゆっくり帰って来るつもりなのだろう——」

そう言われて、始めて母うさぎも、そして、言った父うさぎまでもが、少し心が落ち付いて来ました。

と、思っていると、そのそばから、親子すの一ぴきが、口をはさんで……

「子うさぎさんのことも心配でしょうが、今となってはそれよりも、われわれの方が、早くこゝから、引越しておかないと——なんとと言っても、命あつての物種ですからなア——」

そうしゃべりながらも、おく病者の親子すは、山火事がおそろしくておそろしくて、大きなしっぽを小さく細めて、カチカチはを鳴らしながらふるえていました。

が、父うさぎは、こんどは、思いの外元気そうに……

「いや、そんな心配はいりませんよ——どんなに大きな赤い花の悪までも、この谷川だけは渡れないと思いますから、もっと落ち付くことが大切です——それに、なるべくここにおってやらないと、子うさぎ達が、帰って来た時に心配しますからなア——」

最前から、こうした話を聞いていたツキノワは、これで自分も安心しました。それで、子どものおそろしい物見たさに、もっとはっきり火の手をみようと、大くりの木の中ほどまで、元気によじ登っていきました。

が、ちょうど、その時です。

まっ黒な雨雲の中から、ピカリッ！と、いなづまがきらめくと、ザアと、大つぶの雨が、たたきつけるように降って来て、すぐ、耳をつんざくような、はげしいかみなりがとどろきました。

で、かみなりぎらいのツキノワは、思わず目をつぶって……

「くわ原、くわ原——」

と、耳をおさえながら、そうつぶやいた言葉も、その半分は泣声です。そして、その泣きづらの上で、また気ちがいのように、ピカッピカッと光り、ゴロゴロ鳴って、かみなりは、滝のような雨と一しょに、まっ黒な雲に乗って、だんだんこちらへ近づいて来ました。

たまらなくなったツキノワが、大くりの木から降りようと、かた足はずした時でありました。目もくらむような、するどい光のいなづまに打たれて、

「助けて——！」

と、さけぶと同時に、

地面をたゞきつけて、耳のこまくも破れてしまったかと思うような、物すごいかみなりが鳴って、気の遠くなったツキノワは、大くりの木からすべり落ちると、もう何もかも分からなくなってしまいました。

それから、いく時間かが過ぎて……

朝になっても降りやまぬ大雨と大あらしの、はげしいひびきにツキノワは、ようやく正気を取りもどしました。そして、キョロキョロあたりを見回して……

「あっ僕らの岩屋だ——」

と思いながら、岩屋の外をながめると、今までに、まだ見たことのないような大雨で、あらしは、立木も吹き飛ばすような勢いで吹きながっていました。そして、雨水が急流のように、ゴーゴーひびきを立てて、今少しで岩屋の中まで、流れこみそうな水かさになっていました。

それで、ツキノワは、心配になって来て、そばにいた母くまへ、

「おかあさん——」

と、言ってだきつくと、母くまも、ツキノワをだきかえして……

「よかったね、よかったね——もう少しでお前は、かみなり様に、打たれてしまうところだったんだよ——」

と、教えてやると、ツキノワは、聞きただすように……

「かみなり様、くりの木へ落ちたの——」

そう言って、目を丸くしましたが、母くまはすぐ、それを打ち消して……

「いえいえ、くりの木は助かりましたが、そのとなりの三本杉にかみなり様が落ちたので、一番高い杉の木が、まっ二つにひきさかれて、まっ黒く焼けこげてしまいましたよ——」

「えっ、あの一番高い杉の木に——」

ツキノワは、もしも、杉の木に登っていたら、かみなり様に打たれて死んでしまっただらうと思うと、ぞっと寒気がして、短い首を、一そう短くちじめました。

そして、また、そーっと首をのぼして、今度は、岩屋の出入口の方へ目をやると、そこには、この山で一番年かさだと言われる父くまが、いつもとちがってむっつりとした顔付きで、大空一面にまだ、まっ黒くおおいかかって、なかなか去りそうもない雨雲をながめていました。

が、ツキノワの目を感じると、ひとりごとのように……

「ひょっとすると、山つなみになるかも知れんよ——そんな時には、丸木橋を渡って、峠（とうげ）の一番上へ逃げるんだなア——」

そう教えるように言ってから、また、心の中で、逃げる時の計画を立てていました。

それは、けもののかんで、いくら日照り続きの後でも、こんな大雨が三日も降ると、山つなみがやって来て、森も林もみんな、だく流にのまれてしまうことを、父くまは、もうなんべんも経験しているのです。

風は、少しやみましたが、足がら山に降り続く大雨は、きょうでちょうど、三日目の朝をむかえました。

そして、だく流におし流されて、つつみの一部がくずれると、そこからあふれ出した大水は、初めは、白波を打って流れていましたが、だんだん広い地面一ぱいに広がって、野じかのすも、いつの間にか、油のにじみこむようにこう水につかってしまいました。

で、父じかは大声に……

「さぁみんな、私について来るんだ——だが、あわてると、足を水に取られるから、用心して歩くんだよ——」

と注意して、家族を連れて雑木林まで出て来ると、あらしのために立木が、あちらこちらにたおれていました。そして、そこも、深い落葉がういてしまっていたので、たおれた立木を飛びこえながら、落葉の上を浅せを渡るようにして通りぬけ、少し川上で、水のあふれ出していない高いつつみの上へ登っていきました。

が、川原は、見わたすかぎり一面に水があふれて、川の流れが深いので、どこから歩いて渡ること

ができません。

「——これじゃ仕方がない。みんなで泳ぐことにしよう。流れが早いから、ななめ横に川下の向う岸へ、流れに流されながら泳いで、金太郎さんの家のある丘へ逃げるんだ——」

そう、父じかが教えると、母じかも賛成して……

「それが一番安全です——私は、子ども達の後から泳いでいきますから、おとうさんは、先に泳いで下さい——」

話が決まって、父じかが、最初にだく流へ飛びこむと、続いて子じか達も、ジャボンジャボンと飛びこみました。そして、最後に母じかが流れにはいつて、みんなで用心しながら流れに乗って泳ぎ出しました。

が、子じか達は、こんな強い流れを泳ぐことは、生れて初めてですから、みんなヒヤヒヤしながら泳いで行きました。

その様子を見て母じかは、後の方から……

「——水を飲まないよう頭をあげて、元気に泳ぐんですよ。流れに負けてはいけません。四本の足を休ませず、交代に働かせて流れをかくんです——しかのなか間は昔から、泳ぎにかけては、どんなけものにも負けたことはありません——だから、お前達もしっかり泳ぐんですよ——」

と、大きな声で、声えんしました。

そうです。母じかの言う通りです。しかは泳ぎが、他のけものよりも達者で、遠い海を島から島へ、楽々と泳ぎ回る大じかさえあります。それで、ジロツポも初めの間は、少し水を飲みましたが、母じかの声えんで父じかの後に続いて、どの子じかよりも早く、向う岸へ渡り切ることが出来ました。

それで、ジロツポは、うれしくてうれしくて、父じかよりも先に立って、飛ぶように丘を登って金太郎の家へかけて行きました。

が、金太郎のすがたは、家のどこにも見当りません。で、がっかりしていると、野じかの家族もみんなやって来ました。

すると、その足音を聞き付けた金太郎の母が、家の中から出て来て……

「——みんなも、達者でよかったね、金太郎は今、滝の上手で仕事をしていますが、お前達は、山つなみの終るまで、ここにいる方が安全ですよ——」

と、やさしくいたわりながら、野じか達を裏の小屋へ連れて行きました。

そして、かわいた布を出して来て……

「まあ、こんなにぬれて、これでは、けものでも病気にかかりますよ——」

そう言って、野じか達のぬれたからだを、すっかりきれいにふいてやったので、父じかも母じかも、うれしそうに金太郎の母へ、からだをすり付けて来て、前足でトントン地面をたたいて……

「ありがとうございました——」

と、感謝の喜びを表わしました。

で、子じか達も両親を見習って、しかの習性であるトントンと、みんな前足で地面をたたいて喜んで……

「この大雨では、みんなも食べ物がさがせないから、おなかがすいたことでしょう——」

金太郎の母は、そう言いながら、よくじゅくしたいちじくの実を、大きなかご一ぱい重そうに出してくれました。

「ごち走だなア——」

と、子じか達は、三日間の長雨で食べ物らしい食べ物は、少しも食べていませんから、すぐ、飛びつくように、かごの周囲へ集まって来ました。

すると、母じかが横から……

「おぎょうぎよく、みんなでいただくんですよ——」

と、子じか達をたしなめました。

それで、ジロツポもみんなと一しょにぎょうぎよくいちじくをごち走になりました。

そしてしばらく、うす暗い小屋のすみずみまでよく見回していましたが、とつ然

「ヤトだっ、ヤトがいる——」

そうさげびながらもジロツポは急にうれしくなりました。

それは、心配していたヤトが、この小屋のすみの方で、しき草の上にていたからです——山火事で弟うさぎを救ったヤトは、やけどの手当てをしてもらって、そこにねていたのです。そして、弟うさぎ達も、みんな無事らしくそばにいて、初めて見る野じかの大きいからだ、ことに父じかの太づのを見て、かわいい赤い目をパチクリさせていました。

そのころ——金太郎は、滝の、すぐ上手の岩の上に立って、あらしにたおれて流れて来る立木をのけようと、大雨に打たれながら流木よけの仕事に励んでいました。

もしも、滝の上手の岩々にじゃまされて流木の山ができると、川の流れがせき止められて大水が横へ切れてあふれ出し、自分達の畑も家も、こう水のためにおし流されてしまいます。

で、金太郎は、じょうぶなふじづるでなつなを使って、とく意のかけなわで流木を引き寄せる仕事に、一生けん命働いていたのです。

だが、工作中でも友達のことが——ヤト達は、助けてやって小屋にいるし、ジロツポの家族も少し前に、流れをこちらの岸へ逃げて来て、丘へ登って行ったのを見たから心配ないが、ツキノワは、どうしているだろうかと、仕事に励みながらも、心の中では、そのことばかり気にかかってなりません。

ところでその川上では……

第一にささぐまの土あなが、次にしまへびの石あなが、そして、きのうのま夜中ごろからは、野うさぎの石だたみまで、すっかり大水につかってしまって——みんなは、びしょぬれになったまま峠(とうげ)の上へ上へと逃げて行きました。

また、小鳥達のすも大雨に打たれて、枝からたたき落されて流れて行くものが、数え切れぬほどありました。

で、くりの木の、枝と枝との間に作られたりすのすも、二日目から雨もりで、ピチャピチャぬれて弱っていましたが、その木の太いみきに大きなうつろがあったので……

「さあ、こんな時には、ここへひなんするにかぎりますよ……」

と、りすの家族は、みんなそこで、この長雨をさけることにしました。

ところで、くまの岩屋では、きのうの夕方から山つなみをけいかいしていた父ぐまが、一晩中ねむらないで、ねむたい目を無理に見張って、あちらへのそりのそり、こちらへのそりのそり、岩屋の門前をなん度も行き来して、水の番をしていましたが、母ぐまは、ツキノワがおととい、くりの木から落ちてからまだねていたので、岩屋の中で外へも出ずに、ツキノワのかん病のために付き切っていました。

それで、ツキノワは、大雨のひびきを子守り歌のように聞きながらスヤスヤねむってしまって——谷川でやまめを取っているゆめを見ていました。そして、きれいな流れをスイスイ泳ぎ回るやま

めを、今にも、たたき取ろうとした時でありました。あやまって岩の上から流れの中へ、ジャボンと落ちて、

「冷たいっ——」

と、さげんだ自分の声で、思わずゆめが覚めました。

が、それは、ねどこの上から、岩屋の中まで流れこんだだく流へ、ころがり落ちていたのです。

で、あわてて、すぐ、だく流からはい上ると、その時、ふいに、

「さあ！みんな、向う岸へ逃げるんだっ——」

と、命令するような、父ぐまの、ど鳴る声が聞こえました。

おどろいたツキノワと母ぐまは、あわてて父ぐまの後から、その行手の、あちらこちらにたおされた立木を、もどかしそうに飛びこえたり、くぐったりして、丸木橋のたもとまでついて行くと、こちらがわの岸にかかっていた杉の木の先が、もう半分大水にういてしまって、岸からはなれそうになっていました。また、向う岸の根もとの方も、わじかにみきが、根もとにつながっているだけでありました。

「この丸木橋を渡るんですか——」

母ぐまが、不安そうにたずねると、父ぐまは、急がしそうな口ぶりで、

「そうだよ、丸木橋を渡って、ひのき山へ逃げるんだ——」

と、はっきり言い切るので、

「でも、こんなになっているのに、渡られるんですか——」

まだ、母ぐまは心配そうです。すると、父ぐまが、元気づけるように……

「なあに、これでも、渡れんことはないだろう。いつまでも、こちらの岸にいと、すぐ今に、山つなみがおし寄せて来て、みんな流されてしまう——」

父ぐまは、そう答えると同時に、ジャボンと水音を立てて、うきかけた丸木橋に飛び乗りました。

それで、続いてツキノワが、そして、最後に母ぐまが、おそるおそる飛び移ると、その重さで、

ポキッ！と、杉の木の、根もとのつなぎ目が切れてしまって、切れ目のはしが、向う岸のがけを、ガリガリガリっ！とけずるようにして、ザブン！と、大きな水音を立てました。

これで、もう、杉の木は、丸木橋ではありません。一本の流木、いや、いかだ舟になってしまいました。

すると、ちょうど、その時、川上から、せきを切ってあふれ出したこう水が、立木も岩もなにもかも、ゴーゴーおし流しながら、どっと一度に流れて来ました。

「うわぁ——！」

「山つなみだぞ——！」

親子のくまが、あわてふためいているうちに、だく流におし流されたいかだ舟は、ものすごい速力で、川下へ川下へ走り出しました。

で、三びきのくまは、あまりのおそろしさに、ただ、もう、む中で、杉の木のみきと枝とに、一生けん命しがみついていたのですが、それでも、母ぐまは、自分のことよりも、かわいいツキノワが心配で……

「しっかりするんですよ——足のつめをはずすと、波にさらわれてしまいますから——」

と、大声を張り上げて、そう注意しましたが、ゴーゴー流れのひびきが高いので、はっきり聞き取ることが出来ません。

が、ツキノワは、とっさの感じでそれが分かったと、

「うゝん、僕、大じょうぶだ！——山つなみなんぞ、少しもおそろしくないよ——」
と、元気にそう答えました。

それは、ツキノワのからだ小さいため、水のていこうが少ないので、流れる杉の木にまたがって、ゆ快でたまらないと言ったように、右の前足をふって見せて、ニコニコ笑っていました。

しかし、くまのなか間が、いくら、しかのなか間に負けない泳ぎ上ずなけものだと言っても、このはげしい流にのまれてしまつては、どんなに泳ぎのうまい父ぐまでも、思うように泳ぎ切る自信がありません。

それで、父ぐまは、

「水をあななどと、ひどい目にあうぞっ——子ぐまなんぞここで落ちたら、二度とふたたびうかび上れんから——」

と、丸い目を三角にむいて、大声でしかりつけました。

で、ツキノワも、四本の足に力をこめて、しっかりかじりついていました。そして、しばらくの間はげしく流されると、やがていかだ舟は、三びきのくまを乗せたまま無事に、流れのゆるい曲りくねりした川はばの広い所まで流されて来ました。

すると、ふいにツキノワが、うれしそうな声を張りあげて、

「あっ金太郎さんの畑だ——」

そう言って、左岸に見える丘を指さしました。

だが、この岸を、左にそって回れば……

「——すぐ滝だっ」

と、思ったくまの両親は、自分達親子に恐ろしい危けんの、だんだん近づいていることを知って……

父ぐまは、心のうちで、神様においのりしました。また、母ぐまも、口の中で、お念仏をととなえました。

今は神仏におすがりするより外に助かるすべがありません。そして、ただそのご加護を信ずるばかりです。

ところが、子ぐまのツキノワは、あん外平気で、金太郎の家の方へ、だんだん近づいて来ると、せのびするようにこしを上げて、前足を手のようにふって……

「金太郎さん——！」

と、大声に呼んでみました。

すると、すぐ、

「金太郎さん——！」

こだまが、帰って来るのと同時に、

「ツキノワか——！」

と、金太郎の声が、曲り角の向こうから聞こえて来ました。

「あっ、金太郎さんだ。金太郎さんがいる——」

喜んだツキノワと両親が、短い首を出来るだけ高く上げて、下手の方をみると——金太郎が、流れの曲りかどの向こうで、滝のま上につき出た大きな岩の上に立って、真けんな顔をして、とく意のかけなわをかまえていました。

「これで、助かった——」

みんなそう思ったものの、父ぐまは、すぐその後から、心の中に、また、心配がわいて来ました。

そうです。この気持は、金太郎にしても同じです。今度の流木は、ただの流木ではありません。ツキノワ親子が、乗っている杉の木、いかだ舟です。どうしても助けなければなりません。いくら、とく意のかけなわとは言いながら失敗すれば、なかよしのツキノワ親子が、深い滝つぼに落ちておぼれてしまうかも知れません。

で、金太郎も、心で神様にご加護を願いながら、一心こめてのかけなわを、じーっとかまえて、こきゅうをはかって待ちました。

が、その間もないほどに、すぐ目の前へ、杉の木が流れて来ました。

そして……

「あっ、落ちる——」

と親ぐま達が、全身の毛を、一本残らずさかだたせた時、

すうーっと、かけなわが飛んで来て、へびが大口を開いて、えものに飛びついたように、ガクッと、ツキノワと一しょにいかだ舟、いや、杉の木の枝をとらえました。

が、そのはずみで、杉の木は、ぐるっと白いうずをえがきながら大きく向きを変えると、二ひきの親ぐまのしがみついている重い方が、滝の上から滝つぼの方へ、ぐっとつき出てしまいました。

「しまった——」

そうつぶやいた金太郎が、あわててなわを手もとへたぐり寄せようとした時、どっと波打って来た大波のために、あつと言う間もなく、くまの両親は、高い滝の上から深い滝つぼの中へ、大きな水音をひびかせて、まさかさまにたたき落とされてしまいました。

で、金太郎は、すぐ岩かどに、かけなわのはしをもやいつけて、ハラハラさせられながら乗り出すようにして、ゴーゴーだく流の落ちる滝つぼをのぞきこむと……

泳ぎ上ずな親ぐま達だけあって、心配する間もなく、しばらくすると水底から、プクプクプクッと白い水あわを立てて、ぽっかり二ひきとも水面にうかび上って来ました。そして、フーと大きな息と一しょに、きりのように水をはき出すと、ぶるぶるぶるっと元気に二、三度身ぶるいしてから、こちらがわの岸へ向ってゆうゆうと泳ぎ出しました。

足から山物がたり、ゆかりの歌および資料編

ぼくの名は金太郎

古田 誠一郎 作詞 山口 季次郎 作曲

1. チョロリ出たさわがに くまの子が つかめば 力いっぱいはさまれ こりゃ たまらぬと手をふる
2. 木の上のリスのす とばされた さわがに さかさまに飛びこむ こりゃ おどろいた たまげた
3. にげだした親リス うさぎのす 目がけてあわてころんでかけこむ こりゃ こもみんなたまげた
4. すから出た 子うさぎ これを見た 大わし きっとにらんで飛びたつ こりゃ 今度こそあぶない
5. そこへ さっと 風切り とんできた 石ころ はねうたれ 大わし こりゃ かなわぬとにげ出す
6. 石投げた こどもは大声にさげんだ ぼくの名は金太郎 みんな なかよしに 遊ぼうよ

狩りの歌 中村知作詞・作曲.

ジャン ドンドン ジャン ドンドン ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ ウォウ
ジャガジャガドンドン ジャガドンドン カブ隊 あつまれ うさぎ うさぎ せっこうだ
しか しか おっかけろ りす りす でんれいだ くま くま まちうける くみうちだ
かりはすんだ えものはみごと カブの山は つきかげ はれて 光るつきのわ おおぞらに
ラン ラン ラララ ランランランラン ランランラン ラララン ウォウ ウォウ ウォウ

金太郎 作詞=石原和三郎 作曲=田村 虎蔵

- 1 まさかりかついで 金太郎(きんたろう) くまにまたが
りお馬(うま)のけいこ
はいし どうどう はいどうどう
はいし どうどう はいどうどう

- 2 足柄山(あしがらやま)の 山おくでけだもの集(あ
つ)めて 相撲(すもう)のけいこ
はっけ よいよい のこった
はっけ よいよい のこった



ジロツポ 井上 茂 作詞 中村 知 作曲

いたずら子じかの ジロツポは流れの 水で ジャブジャ
ブときれいに毛なみを あらったが

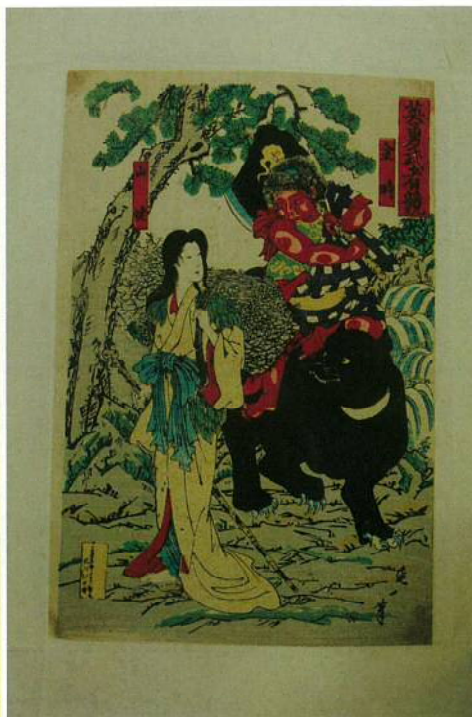
どろんごっこで どろまみれさあ たいへん しかられるピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

いたずら子じかの ジロツポは小さい 角が うれしくてツバキの幹を こづいたら真赤な花が
落ちてきたさあ たいへん そらにげろ ピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

いたずら子じかの ジロツポはすました 顔して 森の道ひづめじまんで かけすぎて
足がら山へ 帰れないさあ たいへん どうしようピーヨー ピーヨー ピーヨーヨー

金太郎の伝説地

南足柄市の伝説地は、足柄山中の山懐に囲まれた地蔵堂地区にあります。ここには古くから「四万長者伝説」がありその長者の娘・八重桐が産んだ子どもが「金太郎」なのです。この地蔵堂地区には「金太郎生家跡（長者屋敷跡）」や「金太郎の遊び石（かぶと石・たいこ石）」・「金太郎産湯伝説・夕日の滝」・「八重桐の腰掛け石」などが散在しています。そして地蔵堂のお堂の中には、「山姥像（金太郎の母親）」などが保管されています。



伝説のあらすじは概ね次のとおりです。

地蔵堂に四万長者がおり、その名前を足柄兵太夫と言います。この長者に八重桐という一人の娘がいました。八重桐は縁あって酒田氏に嫁ぎましたが、酒田一族の争いから逃れるため、地蔵堂の屋敷へもどり金太郎を産みました。金太郎が産まれた時に、屋敷近くにある夕日の滝の水を産湯に使いました。こうして足柄山に金太郎が誕生し、やがて金太郎は人一倍元気に育ち、長者屋敷の庭石である「かぶと石」や「たいこ石」に登って遊んだり、「金時山」へ出かけたりして足柄山を自分の庭のように遊びまわり、山の動物たちもいつしか金太郎の遊び相手になったのでした。やがて金太郎は足柄山の怪童と人々から、うわさされるほどのたくましい青年に成長し、ある日、足柄山中にて源頼光と運命的な出会いをしました。そして頼光の家来として取りたてられ坂田金時と改名し、京の都へ上り渡辺綱・碓井貞光・卜部季武らとともに、源頼光の四天王の一人として大江山の酒吞童子退治をしたりして、その名前を天下にとどろかせました。その後、源頼光が亡くなると三ヶ月間、日夜、頼光のお墓参りをした後、都を去り、ふるさとの足柄山へもどり、その行方をくらましてしまったのでした。

南足柄市の金太郎

「金太郎」と言えば、「足柄山の金太郎」、そして「金太郎のふるさと」と言えば、神奈川県「南足柄市」です。

「金太郎のふるさと・南足柄市」の知名度は全国区であり、金太郎のイメージソング「童謡・金太郎」を知らない人はいないと思います。そんな金太郎伝説ゆかりの南足柄市ではこれまでに、金太郎シンボルマークの制定、シンボルマークの案内標識、金太郎歓迎塔、足柄金太郎まつり、大雄山線大雄山駅前の金太郎ブロンズ像など金太郎を積極的に取り入れてきました。そして最近では、童謡・金太郎の歌碑、金太郎力水、金太郎大明神、金太郎まさカリーパンなど、あらゆる場面で郷土のヒーロー「金太郎」を見かけることができるようになってきました。

